

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

【氏名】安 ウンビョル

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院 学際情報学府

## 【研究題目】

東京圏の鉄道における外国人観光客の移動の実践に関する研究——モバイル・エスノグラフィーを手法にして

## 【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、人々の移動という空間的实践の具体的な実状を明らかにし、その実践から作り出されるものとして都市空間を理解することにある。特に、外国人観光客の東京圏における鉄道移動に焦点を当て、彼らが目的地に向かう過程で道を探す方法、そこで生じる身体的感覚や記憶の活性化、さらには非言語的なものを含むさまざまなコミュニケーションのあり方を調査・分析した。従来、インバウンド観光客に関する研究は主に経済的な影響や移動の量的側面に注目されてきたが、本研究は数値化できない移動の「経験」に焦点を当て、それが作り出す意味やつながりを明らかにすることを目指した。観光客が慣れていない環境へ適応する過程で、さまざまな感覚やコミュニケーションが発生し、既存の経験や記憶の想起、モバイル機器を通じた遠隔コミュニケーションが活性化されると考えられる。このように観光客の移動に注目することは、定住・持続的な関係づくりを中心にした既存の社会集団の枠組みを超えて「社会的なもの」を再考する契機となり得る。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

外国人観光客の空間的实践を詳細に理解するため、観光客の行動に寄り添いながら観察を行う「モバイル・エスノグラフィー」手法を採用した。「モバイル・エスノグラフィー」のなかでも「同行 (Go along)」アプローチを用い、研究者が観光客と共に移動し、その過程を観察、簡易インタビューも交えつつデータを収集した。2023年10月から2024年9月の期間で、6チーム、計13回の「同行」調査を実施した(表1参照)。研究参加者は、研究概要を英語・韓国語で説明したウェブページを通じて募集し、旅程の一部に研究者が同行する形式をとった。移動中の様子はビデオ撮影や会話の録音により記録し、移動中のインタビューやメモを通じて、現場の雰囲気や疑問点も残した。

表1 「同行」の概要

研究参加者	旅行タイプ	出身地	同行を行った日にち
A	個人、ワーケーション、中間期	ウクライナ	2023年10月25,26日
B,C	カップル、中間期	韓国	2024年5月7,10,19日
D,E	カップル、短期間	アメリカ、韓国	2024年5月22,24日
F,G	友人同士、ワーケーション、中間期	イギリス	2024年5月22,25日
H	友人同士、ライブのため、短期間	韓国	2024年6月18,22日
I	個人、短期間	韓国	2024年9月17,18日

本研究は進行中だが、これまでの調査から、外国人観光客の鉄道移動について次の三つの傾向が明らかになった。(1)デジタル地図と実空間を行き来する解釈と対話：観光客の移動は、彼ら誰もが持っているスマートフォンのデジタル地図の絶えない解釈過程であった。単にその検索結果に従って全うするというより、その情報を疑ったり、同行者と話し合っって協力的に方向を決めていた。それはとくに東京圏鉄道特有の、複数の鉄道会社の路線をまたがる「直通列車」を利用する際に著しかった。またデジタルマップと実際の空間を行き来するという事は、駅空間でコーナーを探したり歩きを止めたりするなど、空間において独特なリズムを作ってい

た。(2)異文化理解を伴う比較的観察：彼らは鉄道空間の情報デザイン、通勤通学など日常的な移動中の乗客の振る舞いなどについて、注意を払ったり、「発見」したり、写真を撮ったり、語っていた。その際、とくに自分の出身地、あるいは留学などで長期間経験した東京以外の外国の都市での経験・記憶との比較の表現が著しかった。つまり、移動経験を通じて普段あるいは過去の記憶を活性化させ、複数の都市を行き来しながら、理解を繰り返していた。(3)短時間での空間適応：自分が行きたい駅に着く列車に乗ったことが確かめられたら、しばらくの時間、列車移動時間を有効に使おうとする試みも見られた。友達への連絡や目的地でのレストラン探し、さらには仕事もしていた。また、とくに何もしなくても列車移動は彼らが簡易休憩をとる時間ともなった。このような短時間の馴染んでいく過程から、列車移動がもつ意味をみつけることができる。

#### 【結論・考察】(400字程度)

本研究を通じて、鉄道での移動が単なるA地点からB地点への変位(displacement)、あるいは「デッドタイム」にとどまらず、多様な意味の生産とコミュニケーションに満ちた具体的な経験であることが確認できた。また、都市鉄道は、所与のインフラ、あるいは大勢の人間をただ運ぶ通路ではなく、発見や解釈が絶えず行われるダイナミックな空間として理解できる。また、デジタルマップが我々の空間経験をただ断片化するのではなく、リアルタイムで多次元を行き来する経験と、同行者との協働を促す媒体になりうることも発見できた。これらの知見に基づき本研究は、「観光」について「ある場所を身体的な移動を通して知っていくという一種の知的プロセス」として再解釈する可能性を示唆する。一方で、多様性のある参加者募集の難しさや、「同行」手法の限界、収集データの制約などの課題も明らかとなった。今後はこれらの課題を踏まえ、さらなる調査を継続していきたいと考える。